ミネソタ便り

▼05・01・17　平 野 茂 樹

❺ センセイになった理由（わけ）

●●●・・・

ミネソタ便りに対して　**なぜ小中学校のセンセイを選んだのですか？**　という問いが多く寄せられていますので応えてみたいと思います。これは同時に新年のあいさつの源流への説明でもありますから。この考えは私の信仰に近いと言ったら大袈裟でしょうね？

私の話（学校の場合は授業といってますが）は、できるだけ基本に忠実に話すことをこころがけています。苦労していますが、日本語と英語の表現比較で考えています。表現が大きく異なるところに双方独自の文化（野生）があるように思えるからです。
わかってもらいたいのは
日本人の文化（野生）ですから。

幼稚園・小学生	哲学を話す。
中学生・高校生	知識を話す。
大学生・社会人	知恵を話す。

【話す内容は？】

哲学って？

基本に忠実に。深入りしないで素直に「よく分かっていない」を付け加えれば哲学になる。世の中のことは分かっていない範囲のほうが広いので、そのことをしっかり認識することから始める。感嘆詞や形容詞、副詞はできるだけ使わないことにしている。

哲学は人間でなく、宇宙にとって必要なことを学ぶのだから。

知識って？

できるだけたくさんかき集める。一箇所に留まらず範囲をひろげていくと知識になる。できるだけ「わかってない」とは言わない。知っている範囲で話を織りなすことにしている。

いったん知識に触れた人は、哲学についての話し合いは持ちにくいことを感じあう。お互いにもう哲学は自分で認識しあうものであることを知る。

知識は人間だけに必要な道具につながっていることが多いから。

知恵って？

知ると得をすると思うように興味をそそると知恵になる。もともと欲から生まれたものだからでしょうね？　感嘆詞や形容詞、副詞は効果的に使うようにしている。

いったん知恵の面白さを知った人は、哲学と知識については、これも個人で求めるものでしょう。これを「求道」といい、いろいろな方法を先人が生み出しているので参考にし、自分で修行する。

知恵は、一部の人間だけが欲しがっている禁断の木の実だから。

以上、あえてはっきり区別することで「年とること、終えること」の厳しさをお互いに分かりあう。野生の動物はみんなやっていることだから。

人間だけです。生涯、親離れ、子離れしないで、それを「学ぶこと」と言っているのは。

●●●・・・

【では、話す中身は？】

幼稚園・小学生

宇宙にあるすべてものを「物」と「空間」と「時間」で考えると分かりやすい。
物は「動植物」と「鉱物」に分けるとさらに分かりやすい。

すべて生まれて死ぬものと発生してなくなるものばかりで永遠のものはない。地球上には数千年以内という短い期間でなくなるものがたくさん確認されている。これらの一部を動植物という。動植物が共通して持っているものを「生命」と呼んでいる。地球以外では、まだ、生命を持つ動植物は確認されていない。

このうち生きていて、いつでも自分の意思で場所を変えられるものを動くもの「動物」と呼んでいる。

動いているのは大変なことらしく数百年以内と極端に生命の維持期限が短い。維持期限は短いが、期限が切れても鉱物や空間や時間並みに有効だと信じている動物を特別に「人間」と呼ぶ。信じていることを「信仰」と呼ぶ。この信仰が具体化し、グループ化したものを「宗教」という。信仰は何万年と経っているが、宗教は高々、数千年である。

人間が動物に属することには変わりはない。さまざまな動物がいるが、人間や一部の動物には「目と耳と鼻」が揃っている。動いて生きてゆくためこれらからいろいろな情報を得ている重要な部分である。これを「顔」と名づけた。これらが受けた情報を「色（光）、音，匂い」とした。

●●●・・・

顔にはもうひとつ「口」もある。これは動きながら生命を維持するため必要な養分を補給することに使うのが主目的であるが、音も出せるので同胞と共存し助け合うのに活用している。口は情報を発信する手段として重要な役割も持たせている動物もいる。

しかし、いまでは一部使い方が逆転してしまった動物がいるようだ。いちばん進化していると思っている一部の人間たちで、逆転どころかできるだけ補給しないようみんなで知恵を出し合っている特殊な動物たちである。

野生の動物では考えられない「病気」が人間環境で生まれているようだ。

人間と共存している家畜やペットも同じ道を歩んでいるようだ。

●●●・・・

このため、人間、家畜、ペットにはお医者さんという専門家が必要になり、人間の間では活躍し尊敬されている。

人間と家畜、ペット以外の野生の動物は、いまでもこの「口のきき方」ではない「口の使い方」の原則を守っている。であるからお医者さんはいない。

野性の動物にとって生きるため生涯で必要なことは、すべて巣立つまでに母親や父親から学んだものだけである。この教わったことで対応できない場合は潔く滅びている。生命維持期限を全うしている。

人間が使う言葉と動物が使う言葉とはどう違うのか詳しいことはよくわかっていない。

どうやら動物は身を守るのにいちばん必要な情報収集機能をこの３つの中から選び発達させ競争しているようだ。

情報収集機能以外に「体力」も身を守るが、これは競争するものではなく生存バランスを守る役割のようなもので競争

種目ではないらしい。

人間は、体力の強いものが生き残り、弱いものは滅びると勘違いしてきたようだがそうではない。長い動物や植物の生存の記録を手繰ってみると、生き残ってきた条件は、強いとか賢いからではなく、すこしでも機能を高めようと努力し、変化してきたもののようだ。変化がとまるとその種は滅びるようだ。その証拠に数え切れないほどの動植物が生き延びている。体力の弱いものから強いものまで見事に共存している。

●●●・・・

生命を持つ動植物は、自分の代で変化しつづけて生命の維持期限を延ばそうと努力しているが、ほとんどわずかしか変化しない。しかし、動植物は「生殖」という代を替えて何回も何回も挑戦できる機能を平等に備えているので競争は限りなく繰り返されているのである。

詳細は分かっていないが競争は激しいらしく偏差値は高くない。偏差値を高めるためみな努力している。これを「生存競争」およびその成果を「進化」という。人間にいたってはどの機能でも金、銀，銅のメダルにはほど遠い。その原因は、よくばって二つ追加し「五感」と言って頑張っているからだという説もあるが、よく分かっていない。わからないことを直感でとらえることも覚え「六感を働かせる」とかいう。これを「祈祷」や「占い」に使っている。これは信仰の現われでもあるが、もっと機能を増やそうとする意気込みのようだ。

●●●・・・

野生の動物は３種目で頑張っているようだ。偏差値の低い人間は、道具をつくり利用する独特の方法を身につけて生きてきた。道具はすこぶる便利で強力なので他の動物はもう人間と生存競争するのを諦めたようだ。人間も道具があるので、もう見る、聞く、嗅ぐの機能に磨きをかけることはやめたようだ。道具が極端に発達した 1200 年ぐらい前から人間だけが「退化」の段階を迎えているという学者もいるらしい。定かではない。

相手がいなくなったので、人間は動物との戦いに使った道具に「武器」をいう名前をつけて同胞どうしで使い合っている。この道具は必要以上に発達している。発達しすぎたらしく抑止しようという動きすらでているが止まらない。

なぜか人間は、人間どうしで戦いだしてから、この世に記録というものを残しているようだ。記録に必要なのが「文字」である。この記録を「歴史」という。本当は動物と戦っているときの長い歴史を知りたいのだが、なぜかあまりない。であるから歴史は、短い人間同士の戦いの記録が中心でもある。その中にベストセラーが３つある。すべて宗教と言う形になった

信仰の経典であるが。
　共通していることは、禁断の木の実を食べた人間がそれまでの時間の数十倍をかけ、知識と知恵を整理し、哲学までもどる道筋を示したノウハウものである。ただし、一度読み出すととまらないことが多いことを一言申し添えておく。

　ここから具体的な内容にはいる。
色は無限にある。人間に見える色と他の動植物に見える色との範囲は違う。
　人間に見えない範囲を「赤外線」、「紫外線」と決めた。見える範囲を「可視光線」という。赤外線、紫外線が見える動植物はたくさんいると言われている。よく分からない。
　赤から紫まで仮に７つに決め名前をつけた。「赤，橙、黄色、黄緑、青，藍、紫」とした。人間に見えない赤と紫の外側の色には名前をつけない。つけても人間に見えないので区別ができないから。

●●●・・・
　色は波で、直接みたり、光が物にあたって反射したものを人間が感じたものである。
音も同じ仕組み（波）である。人間に聞こえる音と他の動植物に聞こえる音とは違う。
獣や鳥や虫は人間の数百倍、音を頼りに生きていると言われている。よく分かっていない。
魚もいるが、いつも水の中という人間と違う環境にいるのでほとんど分かっていない。

人間は獣や鳥と比べて遠くで色や音を感じられないようだ。でも、これを電波や光に乗せて運ぶ道具を見つけたので、今では、人間が一番遠くまで音や色を届けることができるようになった。これは人間だけが使う「通信」という道具である。
匂いも同じ仕組み（波）である。人間が感じる匂いと他の動植物が感じる匂いとは違うらしいが、よくわかっていない。人間にとって匂いは遠くに届ける必要性がないらしく、まだ真剣に届ける道具を考えていない。
　野生の動物は嗅覚が鋭いという。狼や犬は人間の５万倍の臭いをかぎ分けると言われているが、これも良く分かっていない。

●●●・・・・
　宇宙にとって必要なことはこれぐらいが適当であろう。これ以上は知識になる。
あとは、一部知識だと断って避けられないことを説明する。
　人間は、みなそれぞれいずれかの「国」に属していかねばならないという掟をつくってしまった。その国に属するには「その国の言葉」が必要なのでおぼえなければならない。
ただし、人間の世界にはいろいろな国と言葉と信仰があることを話す。
　人間以外の野生の動物には、この国と国独自の言葉と信仰は確認されていないので地球はひとつであろう。

中学生・高校生

　この年になると人間以外の動植物には必要のない人間だけが必要としている知識を主に扱うことになってしまう。
　人間の道具を維持発展させるために跡を継ぐ必要があるからでしょうか？
色で言えば、「光の三原色」、「色の三原色」、「補色」などを教える。これに白、黒の概念を付け加え、話をひろげる。みんなが認め合う定義ができ上がるまでを語る。
　日本には色に性格を持たせる文化がある。いちばん端っこの紫はとても高貴なものとされている。色をつくり出す話では織物の世界と出来れば陶器の世界を紹介する。生地、織り方、断ち方、縫い方、染め方など日本文化を紹介する。民族衣装であるきものにも触れる。と衣食住に限りなく話をひろげる。
　音、匂いについても少しでも関係すれば何

でも説明してしまう。
ただし、知識の基本は個性のある解釈は避け、辞書と図書館で調べた範囲にとどめることであろう。
この範囲で話す。これ以上は知恵となる。

大学生・社会人

もっともらしいところから始める。たとえば、人間国宝の染色織物作家から聞いた話などは興味をそそる。
縦糸と横糸の話である。

作家があるファンから講演の席で「先生はどうしていつでもすばらしい織物を世に出されているのですか？　その秘訣を教えてください」という質問をうけた。作家はこう答えている。
「それは私が編み出したあるルールを守っているからでしょう。そのルールとは簡単なことです。織物は縦糸と横糸がありますが、最初に縦糸を仕込みます。このときのやり方が私のルールなのです。縦糸は一度仕込むと途中で替えることができません。それで縦糸を仕込むときは、己を捨て過去の先輩たちが築き上げた伝統を頑なに守って、いまの時代の基本を忠実に反映します。その代わり横糸を通す段階になったら自己流に好き勝手にやり楽しみます。すると不思議に個性があり伝統を守った良い作品と人はほめてくれます」と。

そこで私は、織物だけではなくすべてのことに通ずるのではないでしょうか？と講釈する。

行きつくところ「いろの道」と歴史の話にもってゆく。いろとは、男女のことである。歴史は夜つくられることの例を話す。何を話しても構わない。ただ、知的好奇心を満足させ退屈しないようにすればよい。テーマは無限にある。

知恵の基本は二つの欲、性欲と食欲であることを忘れなければの話であるが。
だいたい以上である。芸術や自然科学と工業技術についても必要時に触れる。
よって、私にとって

幼稚園・小学校のセンセイは哲学者である。教育者とも言う。

●●●・・・・

中学・高校の教師は知識人（辞書）である。ひたすら知識の競争をさせる職人でもある。大学の教授は政治家であればよい。政治家ではつまらない、もしくは政治家が勤まらない人は学者を兼ねる。

本当は、学者が幼稚園、小学校の「先生」をやるべきであるが、今はそうなっていない。日産のたて直しで頑張っているカルロス・ゴーン氏は言っている。この仕事が終わったらふるさとのブラジルに帰って学校のセンセイになりたいと。分かっていただけましたでしょうか？　私が小中学校の教師にあこがれた理由が。

このメールもほとんど真剣で真面目なジョークである。

しかし、このジョークを分かってくれたのは、祖国ではありませんでした。
このようなことを述べたら「話してもいいよ」といってくれたので出かけてきました。
その結果、日本にいません。
以上が前書きで以下本文です。

●●●・・・・

種を明かせば、「私は知識と知恵に自信がないからが選んだ」が本音（正解）でした。ほとんどの知人、友人は持てる知識と知恵を活かし、大学やカルチャーセンターで教えています。

二、三行で済む話をこんなに長く表現するのを「文筆」といいます。これも口の使い方が逆転したことから発生する病気の後遺症なのでしょうか？

まだミネソタに来て３ヶ月弱しか経っていません。半年以上経ったら現地の人や習慣などについてまとめはじめたいと思っています。いつも長くてすいません。ではまた。